

「この指とまれ」ドラマシナリオ

『天の国籍』

作 和田知子
演出 小川政弘
放送 1999年11月
テーマ 死別・天国への望み

登場人物(配役)

川添祐輔	正村和也
〃 小学5年	大橋めぐみ
祐輔の母	大串弘美
葉山なつみ	西崎真奈
〃 小学4年	西崎愛
父 総一郎	小川政弘
母 マリア	和田知子
なつみの担任	空地孝之
牧師	荒木寛二

< 前編 >

祐輔 N 僕の名前は川添祐輔。中学3年だ。そしてこの物語はちょうど4年前、僕がまだ小学5年生の時に始まる。その日、僕はいつものように学校から帰ると、3軒隣に住む1歳年下の幼なじみ、葉山なつみの家に遊びに行った。
(部屋のドアを開ける音。)

祐輔 小5 なつみー、遊ぼうぜ。
あれ、かぎ開いてるのに留守かな？ おーい、なつみー。
(次々にドアを開ける音。)

祐輔 小5 おーい、なつ...。

なつみ 小4 しー。声を出さないで。祐ちゃん、なつみがここにいること、うちのパパには絶対言わないで。

祐輔 小5 え？ あ、うん。分かった。

N その時なつみがいたのは、なつみが「絶対入ってはいけない」と言われてい

たという、彼女の死んだお母さんの部屋だった。普段はかぎが掛かっていて、「いけない」と言われなくても入りようがないのだが、その日はなぜか、なつみの父親がかぎを掛け忘れらしく、部屋は開いていた。

祐輔 小5 (声を潜めて)なつみ、ここで何してんの？

なつみ 小4 (声を潜めて)あのね、ママが書いてくれた手紙。

祐輔 小5 手紙？

N なつみのお母さんはその少し前、彼女が小学3年の時に亡くなっていた。ある朝、なつみが音楽の時間で使うリコーダーを玄関先に置き忘れた。気づいた母親が慌てて後から追いかけて、家から出てすぐの所で、交通事故に遭った。すぐに病院に運ばれたが、駆けつけたなつみたちに会って間もなく、静かに亡くなったという。

<回想>

(キリスト教式の葬儀シーン。讃美歌405番「神ともにいまして」)

牧師 この姉妹は、地上での一切の苦しみに解放され、今は、み国のイエス様のみそばで、安らぎの時を過ごしておられることでしょう。

N なつみのお母さんの葬儀は、ちょっと変わっていた。自宅ではなく、どこかのホールのような所を借りて行われ、菊ではなく、いい香りのする淡いベージュ色のバラの花が祭壇いっぱい飾られていた。そして知らないおじさんが、今思うと牧師さんだったらしいが、話をし、皆で歌を歌ってお祈りをした。

(聖歌521番「キリストには代えられません」)

祐輔 小5 ねえ、お母さん。何でお葬式なのに歌を歌うの？

祐輔の母 しっ。(小声で)あのね、これはキリスト教式なの。なつみちゃんのお母さんは、ずっと外国にいたから、外国のやり方のお葬式なのよ。

祐輔 小5 ふうん。

N 母にそう言われると、バラの花に囲まれて静かに眠っているなつみのお母さんの顔は、以前から何となくそう思っていたが、確かに外国人の、それも、ヨーロッパの人とか、そんな感じがした。

<回想終わり>

祐輔 小5 手紙って、何の手紙？

なつみ 小4 やっぱ、ない。ママの手紙...どこにもないよ。(大声で泣き出す)

N 僕は何だかよく訳が分からず、突然泣き出したなつみのそばにただ立っているだけだった。ふと周りを見てみると、その部屋は、とてもスッキリと簡素な部屋で、真ん中に丸いテーブルがあり、洋書で埋め尽くされた、あまり大きくはない本棚が一つあるだけだった。なつみの探しているその“手紙”がどれほど重要なものなのかはよく分からないが、その部屋には、そんな大事なものをしまっておくような所もなく、「入ってはいけない」と言われるほどの部屋には見えな

かった。

その日以来、二人とも、二度とその部屋に足を踏み入れることはなく、4 年が過ぎ、僕はもうその部屋のことなど、ほとんど忘れてしまっていた。しかし、昨日の夕食の時、僕は再びその事を思い出すことになった。

祐輔

え、引っ越し？

母

そうらしいのよ。わたしもさっきお向かいの奥さんから聞いて初めて知ったんだけど、何かもう突然だから、びっくりしちゃって。

N

母が井戸端会議で得てきた情報によると、父親を残して、なつみだけが、それも遠いドイツに引っ越すことになったという。

母

なつみちゃん、お母さんが亡くなってから、お父さんとはほとんど話もしてなかったらしいのよ。そろそろ高校受験のことなんかも考えなくちゃいけないのに、そんな状況じゃやっぱりよくないだろうってね。ドイツにいるなつみちゃんのお母さんの親せきの方が「うちで面倒を見ますから」って言ってきてくださったそうよ。あ、祐ちゃん、お代わりは？

祐輔

いい、要らない。それで引っ越しはいつ？

母

それが、明日だって。学校から帰ったらもうほとんどその足で空港に向かうそうよ。

祐輔

明日!?

(玄関のインタフォン・チャイム)

母

あら、8時ね。こんな時間にだれかしら。お父さんが帰ってくるにはまだ早いし。

はい、え？ あらあ、なつみちゃん。

N

たった今話していた当の本人が、何だか思い詰めたように玄関に立っていたのには、正直、僕も母もかなりびっくりした。

(紅茶を入れる音。)

なつみ

すみません、こんな時間に。

N

なつみがうちに来たのは何年ぶりだろう。小学生のころは毎日のように遊びに来たから、勝手知ったるうちなのに、彼女は随分遠慮勝ちに居間のソファに座った。久しぶりに見るなつみは、前にも増して、亡くなった彼女のお母さんに似て、背はすらっと高く、少し茶色がかったサラサラの髪、彫りの深い顔立ちに、ベージュに近い、淡い色のひとみをしている。何か用があって来たはずなのに、彼女は黙って座ったまま、一向に話し出す気配がなかった。

母

そうそう、なつみちゃん、薄焼きのおせんべい好きだったわよね。ちょっと祐輔、イレブンマートまで行って買ってきてよ。

祐輔

え、あ、ああ、いいけど...

N

僕が500円玉を握り締めて家を出ようとした時、突然なつみは泣き出した。

なつみ

ママは、...やっぱり...わたしのせいで...(すすり泣く)

母 ぼら、しっかりして。どうしたの？ 何があったの？

N なつみは泣きながら、あの5年前の事故のことを話し始めた。
(回想・エコー)

なつみ(小3) (泣きながら)ママ～、しっかりして。なつみだよ。分かる？

マリア (小声で)な...つ...み...。Burgerrecht...Himmel.

なつみ ママ、何？ ママ？

マリア な...つ...み...、こ...れ...。
(回想中断)

なつみ ママは、病院で亡くなる寸前に、わたしにとても小さい声で何か言いました。でも、すごく小さい声でよく聞き取れなくて。そしたら、ママは震える手で、わたしに手紙を書いてくれました。でも...。
(回想再開・エコー)

なつみの父 なつみ、それはパパが預かる。渡しなさい。(手紙を見て)何てことだ。

なつみ ばば？ 何て書いてあるの？ 返して、それ返して！

父 なつみ、この手紙はしまっておく。見ちゃいけない。

なつみ 何で？ パパお願い、それ見せて！ パパ～！
(回想終わり)

なつみ ママが亡くなってから、パパはママの部屋にかぎをかけ、わたしに「絶対に入ってはいけない」と言いました。手紙は恐らく部屋のどこかにしまっていると思います。パパとはそれ以来、あまり口を利いていません。

祐輔の母 まあ... そうだったの

なつみ ママが死んだのはわたしのせいなんです。あの時、わたしが忘れ物なんかしなければ、ママは事故に遭うことはなかったんです。パパはそのことで、わたしを恨んでるんです。きっとママも、わたしのこと恨んで、それを手紙に残したと思うんです。わたし、ドイツなんか行けない！ きっとママの家族だって、わたしのこと恨んでる。(わっと泣き出す。)

N 「そんなことない」、そう言いたかったが、なつみの母が、なつみを追って事故に遭ったのは事実だし、手紙の内容ももとより知らない僕や母は、ありきたりの慰めの言葉しか言えなかった。なつみはしばらく泣いていたが、やがて落ち着き、母と僕に今までの礼を言い、帰っていった。なつみは恐らく今まで、ああやって一人で自分を責め続けてきたのだろう。それを思うと、こんなに近くにいて何も気づかず、何もしてこなかった自分が情けなかった。そうだ、明日放課後、なつみを待って、一緒に帰ろう。何ができるわけではないが、独りよりはいいかもしれない。その夜はなかなか寝付かれなかった。物心ついてからの、2人の色んな思い出が浮かんで来て、何だかこのまま永遠に会えないような気がして不安だった。その時、初めて僕は、なつみが好きだったことに気づいた。

(学校のチャイムの音。)

N 翌日の朝。眠気眼で学校に行った僕は、いきなりなつみの担任の言葉に驚かされた。

祐輔 え、なつみが来てない？

なつみの担任 そうなんだ。知ってると思うけど、今日で葉山が最後だから、クラスでお別れ会をすることになったんだけど、肝心の本人が来てない上に、何の連絡もないんだ。川添、葉山の近所だって聞いたから、何か知らないかと思ったんだが。

N 嫌な予感がした。昨日のなつみの言葉が頭の中でグルグル回った。

なつみ(エコー) ママが死んだのは、わたしのせいなんです。きっとパパも、ママの家族だって、わたしのこと恨んでる！

なつみの担任 おい、川添、どこへ行くんだ？

N 気がつく、僕は学校の上履きのまま、なつみの家へ無我夢中で走っていた。

<後編>

なつみ(エコー) ママが死んだのはわたしのせいなんです。パパはそのことで、わたしを恨んでるんです。きっとママも、わたしのこと恨んで、それを手紙に残したと思うんです。わたし、ドイツなんか行けない！ きっとママの家族だって、わたしのこと恨んでる。(わっと泣き出す。)

N 昨日のなつみの言葉が頭を離れなかった。なつみが家にいてくれればいいが、もしいなかったら？ 僕は、いても立ってもいられなくなり、学校の上履きのまま、なつみの家へ走った。

(がチャ。玄関を開ける音。)

祐輔 なつみ！ なつみいますか？!(応答なし)

祐輔 おーい、なつみ!

(片っ端からドアを開けていく。)

N なつみの家の玄関は開いていたが、なつみはどこにもいなかった。残るはあと一部屋、あの入ってはいけない、彼女のお母さんの部屋だけだった。

祐輔(モノ) どうか開きますように。ここにいますように。

(がチャ)

祐輔 なつみ!

なつみ しっ! 祐ちゃん、大きな声出さないで。

祐輔 なつみ、何やってんだよ。入っていいのか?

なつみ 祐ちゃん、あったの! ママの手紙があったの!

祐輔 何だって? どこに?

なつみ この本。この本の中に挟まっていたの。

N そういってなつみが差し出した本は、きれいな布のブックカバーが付いていて、

中にはその手紙のほかに、なつみの小さい時の写真も挟まっていた。彼女のお母さんが大切にしていた本に違いなかった。

祐輔　じゃあ、朝からここにいたのか？ どうやって入ったんだよ。

なつみ　昨日パパが、この部屋のかぎをテーブルに置いたままバスルームに行った隙に、違うかぎと取り替えたの。ねえ、でも祐ちゃん、ママの手紙あったけど、何て書いてあるか分からないの。

祐輔　どういことだよ。

なつみ　これ。

N　なつみが差し出した手紙は、シンプルなエアメール用の便せんに、真ん中に見慣れない言葉が小さく書かれてあるだけだった。

祐輔　ウ...プール？ エー... 何だよ、これ。

なつみ　ママ、ドイツ人のハーフだったから、多分ドイツ語だと思う。

N　僕は一瞬、あの葬儀の時の、彼女のお母さんの美しいヨーロッパ人風の面立ちを思い出していた。

なつみ　でもなつみ、ドイツ語なんて全然知らない。

N　なつみは今にも泣きそうに、首を横に振った。その時、部屋の戸が激しく開いた。

なつみの父　2人とも、ここで何をしている？

N　振り返ると、なつみの父親が、恐ろしく冷たい目をして、戸口に立っていた。

父　その本を返しなさい、なつみ。

なつみ　...イヤ。

父　それは大切なものなんだ。返しなさい。

なつみ　やだ!

父　返せと言っているだろう!

祐輔　やめろ!

N　なつみの父親は、力づくで彼女から本を奪い取ろうとした。僕はとっさにその手を払いのけた。

父　君は祐輔君か？ ふん、随分大きくなったじゃないか。だが、悪いがこれはうちの問題だ。邪魔しないでもらおう。

祐輔　ふざけるな! なつみがどれほど苦しんでいるか、知ってんのかよ!

父　君には関係のないことだ。そこをどきなさい。

祐輔　何でだよ! 何でこの手紙を隠したんだよ!

(車のクラクション)

父　迎えのタクシーが来た。なつみ、行く時間だ。その本は返しなさい。そしてさっさと支度して出なさい。さ、返すんだ。

なつみ　やだ!

父 なつみ、返せと言ってるだろう!

祐輔 なつみに何をする!
(なつみの父に殴られて)うぁ!

なつみ 祐ちゃん!
(クラクション、再び鳴る。)

祐輔 なつみ、行け! 僕が押さえているから、早くそれを持って行くだ!

父 祐輔君、どけ! 邪魔をするな!

なつみ でも、祐ちゃん...

祐輔 いいから早く行け!
(再びクラクション)

父 待て! なつみ! こいつ!
(なつみの父に突き飛ばされた祐輔、テーブルに当たり、ひっくり返る。)

祐輔 ぐぁぁ!
(タクシー、走り去る。)

祐輔、父 (互いに「はぁはぁ」あえぐ音。)

父 行ってしまったのか。...マリアも...なつみも...みんな、行ってしまったのか。

N なつみの父親はそうつぶやくと、力なく壁際に座り込んだ。僕も何だか気が抜けて、その場にへたり込んだ。殴られた痛みはそれほど感じなかったが、まだ手が震えていた。

父 ウンザー ビュルガレヒト アーバー イスト イム ヒメル
Unser Burgerrecht aber ist im Himmel.

祐輔 え?

父 妻の...マリアが最期に言った言葉だ。なつみが知りたがってた、あの手紙にも書いてある言葉だよ。でも、ドイツ語を知らないなつみには、何を言っているか分からなかっただろうし、手紙を見ても何のことか分からないだろう。

祐輔 ...どういう意味なんですか?

父 「けれども、私たちの国籍は天にあります。」(ピリピ3:20)

祐輔 は?

父 マリアは、ドイツ人と日本人のハーフだが、ずっとドイツで育ったんだ。敬けんナクリスチャンの家庭でね。彼女は、あのなつみが持っていった本...聖書をいつも持っていた。これも、その聖書の中に書いてある言葉だ。わたしと妻のマリアとは、わたしが留学していたドイツの大学で知り合った。彼女は最初、外国人であるわたしとの結婚に、そして日本に来ることに不安を感じていた。それは、同じく外国人同士だった彼女の両親の苦勞を知っていたからだろう。国の違い、言葉の違い、生活習慣の違い、考え方の違い、そして宗教の違い...。しかし、わたしとマリアは、同じキリスト教の信仰で結ばれ、この聖書の言葉を信じて「国籍」の壁を乗り越えたんだよ。そして様々な地上の違いに捕らわれない

で、共に信じる神に、神のおられる天にこそ望みを置いて生きていこうと誓ったんだ。...なのに...彼女は先に逝ってしまった。...

N 不意に声のかすれたなつみの父親を見ると、目から涙が流れていた。

父 「これが夢だったらいい、うそだったらいい」と何度思ったろう。それまでわたしは“妻と共に天国まで一緒だ”ということが分かっているつもりでいた。だが、今、目の前で死んでいく妻に、心の準備ができていなかった。わたしは、地上での妻を愛しすぎて悼んだ。死に際に残したあの手紙を見た時、「これはだれにも見せない、渡さない」と心に決めて、彼女の愛した聖書と共に、この彼女の部屋に閉じ込めたんだ。ここにはいれば、いつでも妻と一緒にいるような気がして....

祐輔 だからって、...何でなつみを苦しめたんですか?なつみは、お母さんの死を、自分のせいだって、お母さんは自分のこと恨んでたんだって、ずうっと思ってきたんですよ。あなたも、大事なお母さんを奪った自分を恨んでるって。ドイツのお母さんの家族も、自分のこと恨んでるだろうから、行きたくないって。

父 なつみは...そんなこと考えてたのか...何てことだ。恨んでなんかない。わたしだって、マリアだって。マリアはあの手紙で、こう言いたかったはずだ。「わたしたちは天国でまた会える。なつみも、イエス様を信じて、やがて天国に来てほしい」って。そのことを、あの子にもっと早く言ってあげるべきだった。それなのに、わたしは自分のことだけ考えて....

祐輔 今更ここでそんなこと言ったって何になるんだよ! なつみはもう行っちゃったじゃないか! おじさん、なつみが乗る飛行機って何時に出るんですか?

父 ...5時、...いや、5時半発だ。

祐輔 おじさん、車出せる? 今なら間に合うよ。なつみが行ってしまう前に話ができるよ。行こう、空港に行こう! おじさん、早く!
(バックに車走行音、街の雑音。)

N 上りの高速は、少し早めのラッシュが始まっていたが、空港へ向かう下り線はスムーズだった。この分なら間に合うかもしれない。

父 祐輔君、さっきは殴ったりしてすまなかった。

祐輔 いいですよ、もう。それより、なつみはこれからずっとドイツに住むことになるんですか?

父 その方が、なつみにはいいだろう。向こうの家庭は信仰も厚いし、なつみを引き取る叔母も、マリアの妹だが、多少日本語が話せるから、心配は要らない。...寂しいか、祐輔君?

祐輔 いえ、僕となつみはまた会えるかもしれないから。

父 ん?

祐輔 「けれども、私たちの国籍は天にあります」だったよね、おじさん。

父 そう、そうだよ...祐輔君。今度の日曜日、わたしに付き合わないか？
祐輔 え？
父 教会と一緒にいかないか？愛する者が再び天国で会うには、しなけりゃいけないことがあるんだ。それを知りたいだろう？
N 僕は黙ってうなずいた。高速道路のオレンジ色のライトに導かれるように、僕たちの車は、空港へとひた走っていた。

(完)